

発表要旨①

東方アッシリア教会とカトリック教会の 共通キリスト論宣言について

清泉女子大学大学院 人文科学研究科人文学専攻（キリスト教思想） 博士課程
山崎あすか

典礼を生命視する以外に、拒絶すべき間違った教義でない正しい教えを追求した東方教会に対し、西方教会カトリックは歴史的に一致を追求してきた。特に、エキュメニカルな普遍教会を目指し十九世紀には教皇レオ十三世が、二十世紀には教皇ヨハネ・パウロ二世が突出して「分かたれた兄弟との対話」を呼び掛けた。1994年教皇ヨハネ・パウロ二世は東方アッシリア教会総主教ディンハー四世とともに、「カトリック教会と東方アッシリア教会の共通キリスト論宣言」を発出した。

遡って第二バチカン公会議（1962-1965）は「現代化」の旗幟も鮮明に開催され、「エキュメニズムに関する教令」が公布された。『カトリック教会のカテキズム』（ラテン語規範版、1997）は、『第二バチカン公会議 公文書全集』を補足する形で、教皇ヨハネ・パウロ二世の在位中に企画・出版された。同書序文、教皇の使徒的書簡「大きな喜びをもって」によれば、本書は「カトリックの信仰と教理とが誠実に体系的にまとめられた」、「カテキズムないし信仰・道徳にかかわるすべてのカトリックの教理についての概説書」である。この書「典礼の多様性と神秘の単一性」の項では、カトリック教会が、ラテン典礼、ビザンティン典礼、アレクサンドリア典礼ないしコプト典礼、シリア典礼、アルメニア典礼、マロン典礼、カルデア典礼などに対し「同等の権利と榮譽を持つものと認め、それらが将来も保存され、あらゆる方法で促進されるように望む」ことが言明された。東方アッシリア教会とカトリック教会の共同宣言は、この方向性の中で行われた。

シンポジウム

東方キリスト教諸教会における「聖なるもの」への崇敬

一人・物・場所一

提題 1

20 世紀エジプトにおける聖メナス崇敬の復興運動

三代川寛子（東京外国語大学）

アレクサンドリアの聖メナスはローマ帝国期の殉教者であるが、その墓が癒しの奇跡を起こすとの評判から、4～7 世紀ごろに広くキリスト教世界から巡礼者を集めた。7 世紀のアラブ・イスラーム軍のエジプト征服により巡礼が困難になると、巡礼都市は荒廃し、同聖人は徐々にエジプトのキリスト教徒の間でも忘れられていった。

20 世紀初頭に聖メナスの巡礼都市が発掘されたが、実際にエジプトのコプト正教徒の間で聖メナス崇敬復興の機運が高まったのは第二次大戦中であった。1942 年のエル・アラメインの戦いの際、連合軍側で戦っていたギリシア兵の間に、聖メナスが戦場に現れてドイツ兵を撃退したとする奇蹟譚が出回り、それをもとにアレクサンドリアのギリシア正教会が聖メナスの巡礼都市遺跡に教会を建設する計画を立てたのである。それを受けてアレクサンドリアのコプト正教徒の間で聖メナスをエジプトの聖人と捉える動きが現れ、同聖人の巡礼都市遺跡への訪問ツアーが組織されるなどして関心が高まり、聖メナス崇敬が盛んになっていった。

提題 2

中世コプト教会の聖人崇敬における ビザンツ教会の影響について

辻明日香（川村学園女子大学）

古代末期から数百年を経て、中世のコプト教会では再び聖人伝の執筆や編纂が盛んになった。隠修士の聖人伝であるという点においては古代末期のそれと同様であるが、個々の聖人の活動に関しては古代末期のエジプトにおいては認められない特徴が複数みられる。その例の一つは佯狂者としての聖人像であるが、これらには中世ビザンツ教会の聖人伝の影響が指摘できるのではないかと、その背景には十字軍期エルサレムにおける諸教会の交流があるのではないかと発表者は考えている。本報告においては具体例を提示しつつ、中世コプト教会の聖人崇敬におけるビザンツ教会の影響について検討したい。

提題 3

聖セルギウスから聖サルキスへ

12 世紀アルメニア教会における聖人伝の受容

浜田華練（東京大学）

聖サルキス＝聖セルギウスは、アルメニア教会では最も人気のある聖人の一人である。しかし、アルメニア教会における聖サルキス崇敬は、複数の異なる「聖セルギウス伝」が混同されている上に、土地の非キリスト教的伝承と習合し、アルメニア教会以外で崇敬される聖セルギウスとはほとんど別物になっている。本発表では、アルメニア教会における聖サルキス崇敬の伝統と、それがシリアやグルジアなど隣接する教会からアルメニアの聖サルキス信仰がどのようにみられていたかを概観した上で、アルメニア語圏で聖サルキス（セルギウス）の聖人伝として最も広く受け入れられているテキストであり、12 世紀にシリア語から翻訳されたとされる「聖サルキスとその息子マルティロスの殉教」の成立とその背景について分析する。

提題 4

アトス山カラカル修道院の グルジア（ジョージア）関連写本について

前田弘毅（東京都立大学）

オクロピリ・ジクリ（トビリシ国立大学）

正教の聖地アトスにはグルジア（ジョージア）所縁の修道院が少なくない。東グルジアの別名イヴェリアに由来するイヴィロン修道院は 10 世紀にビザンツ帝国で活躍した軍人トルニケ・エリスタヴィによる創建であり、同修道院に安置されている生神女マリामのイコンはグルジア中で崇敬されている。また、同修道院で 10 世紀から 11 世紀にかけて活躍したイオアネ・ムタツミンデリ、エクフティメ・アトネリ、ギオルギ・ムタツミンデルの三名の修道士の活躍は、中世グルジア王国におけるキリスト教文化隆盛に道を拓いた。

報告者は 2017 年 4 月復活祭の最中に現地を訪問し、イヴィロンおよび近隣のカラカル修道院でグルジア関連文書等の調査を行った。報告では、調査の概要と、その際に実見したグルジア語の署名などを含む 3 点の文書と 1 点の写本について検討を行う。特に偶然発見に至った後者の写本については、17 世紀後半に作成された福音書であり、当時の東グルジアの政治状況に関する新たな知見ももたらすものである。

発表要旨②

テキストの構造からの、書かれたテキストとしての、作品読解

ナジアンゾスのグレゴリオス『第 19 講話』（仮題）

エディンバラ大学博士課程古典学専攻
窪信一

アテナイへの留学経験を持ち、ギリシアの古典教養を身につけたナジアンゾスのグレゴリオスは、文人 (οἱ περὶ λόγους) としてロゴイ（言葉や修辞という一つの訳語に収まらない意義を持つ）で身を立てる目標を異教の弁論家や哲学者と共有していた。キリスト教の聖職者の道を選んだ彼の場合、そのロゴイはギリシアの宗教から切り離れたうえで教会の司牧と結びつけられる。そのようなロゴイの昇華ないし浄化をグレゴリオスが、証言としてテキストから切り離されて引用されるような文言だけではなく、個々のテキスト全体（ロゴス[一つの弁論や講話もロゴスである]）でもって表現しようとしていたことを、本報告は『第 19 講話』のテキストの構造から例証したい。

ビザンツの文芸カノンに入った後古典期の作家たちは、その場にいた聴衆に対する演説の単なる原稿ではなく、後世の読者に向けて書かれたテキストとして意匠を凝らして弁論を書き残した。ナジアンゾスのグレゴリオスもその一人であることを、同じ『第 19 講話』を一例にして示したい。

「神学者」と呼ばれた教父グレゴリオスは、キリスト教徒の文人の権威ある規範として、ギリシアの古典教養が中世ビザンツ世界へと持続していく結節点となった。本報告は、その事実に対して、彼が書いたテキストという実践ないし行為の観点からアプローチを試みる一環である。

19 世紀以前のロシア正教会の統治様式

一 府主教制、総主教制、そして宗務院制（仮題）

東京大学大学院 総合文化研究科 博士課程

小野成信

ロシア正教会では 1589 年以前には府主教が、それ以降は総主教が、ロシア正教会主教団の第一人者たる首座主教の任を担っていた。府主教から総主教へと首座主教の位階が上がると、総主教は同格者中の第一人者ではなく、同格者のない第一人者と認識されるようになる。しかし総主教制は、1721 年にピョートル 1 世によって廃止され、ロシア正教会の統治形態として宗務院（シノド）制が導入された。「シノド」という名称がギリシア語で公会議を指す「シノドス」から取られたとはいえ、宗務院は主教、修道院長および妻帯司祭計 11 人から構成され、ロシア皇帝の代理として世俗の役人、宗務院総監が会議に出席していた。一般に宗務院制は、ロシア正教会がロシアの国家機構に取り込まれたものとして否定的に捉えられ、フロロフスキーなどの神学者も同様の見方をする。しかし、19 世紀ロシア正教会の神学者、府主教フィラレート・ドロズドフは「総主教とは 1 人におけるシノドであり、シノドとは数人の成聖され選ばれた人々における総主教なのである」と述べ、またシノドとソボール（公会議）をシノニムとしていた。ホンジンスキーは、フィラレートの言葉に見られるように、19 世紀ロシア神学においては宗務院を「公会議」と捉える考えがあったことを指摘し、宗務院制によって変わったのは教会と国家との形式的関係だったと主張する。本発表では、15-17 世紀ロシア正教会の府主教制、総主教制を概観した上で、ロシア正教会における宗務院制の位置づけについて検討する。